

日本の新宗教の組織的展開 ⑫

天理大学国際学部教授
山田 政信 Masanobu Yamada

ブラジルの諸宗教はカトリシズムという広かつ複合的な舞台のうえで様々な展開を見せている。そこで、本稿はなかでも新宗教の動態を探ることを目的に、①カトリシズムとその変容(カリスマ刷新運動とプロテスタント教会)、②ニューエイジと心霊主義、③三つの日本の新宗教(天理教、生長の家、パーフェクトリバティー教団)の受容という、宗教変容の三本の柱ともいえる事象について眺めてきた。筆者はこれまで各教団を個別的事象としてそれらを縦断的に論じてきた。そこで今回からは教団横断的な視点で信者の意識と行動を比較してみたい。ここでは天理教、生長の家、パーフェクトリバティー教団に加えて、カルデシズムに着目する。これらブラジルの新宗教はどのような差異や類似性を示しながら展開しているのだろうか。差異と類似性が明らかになれば、おそらく各教団の特殊性も照射されることになるだろう。

そこで、以下では質問紙調査の結果を眺めてみたい。調査は筆者が1999年5月から約1年間レシーフェ市に滞在した際に行われた。レシーフェ市については本誌 Vol. 15 No.11 で紹介しているのでそちらを参照していただきたい。ここで扱う調査データが残念ながら古いことは否めないものの、筆者は調査を行って以来、経年的に観察を続けてきている。ここでは、信者を取り巻く社会環境の変化に注目したい。

ブラジルは1980年代に「失われた10年」を経験したのち、1994年のリアルプランの成功によって経済の安定化がみられた。そして、2000年以降はBRICsの一国をなす新興国の優等生と言われるような経済発展を遂げてきた。それによって人々の生活環境にかなりの改善がみられた。携帯電話や自家用車が大衆化したことはその一例といえよう。2004年に貿易収支は約337億ドルを記録して最高の貿易黒字を計上した。しかしながら、近年ブラジルの経済成長に陰りが見え始めている。たとえば2006年5月のインフレ率は4.2%だったのに対して、2015年5月では8.5%となり景気の鈍化がうかがえる。しばしば新宗教への入信要因として語られる「貧・病・争」の「貧」に関わる問題がかつてブラジルの人々を苦しめたように、それらが再び彼らの日常を襲いはじめている。筆者が調査を行った時期はブラジルの経済状況がようやく安定し始めた頃に相当する。しかし、調査の対象になった人々は社会変動のさなかの入信が多い。調査データを見る限り、入信理由には「病」と「貧」の割合が高い。昨今の経済動向を鑑みた時、ここで扱うデータが今後を予見する可能性を必ずしも否定できないのである。

1. 基本属性

(1) 年齢

信者の平均年齢を見てみると、いずれの教団も40歳前後であり、壮年層が多いことがわかる。彼らは経済活動の中心的存在で社会的責任を負わなければならない立場にある。そのため日常生活で苦難を克服する必要性に迫られる機会が多くなることが考えられる。生長の家と比較すると天理教とPL教団で若い年齢層の割合が高くなっている。メンバーの年齢構成は、各拠点の雰囲気と活動内容にも影響されるとみられる。天理教とPL教団では祭典日(月次祭、一の日詣)になると信者が拠点

で1日を過ごすことが多い。そこには家族的な雰囲気があり、家族連れで参加している姿がみられる。信者子弟らは拠点の雰囲気に慣れ、代を重ねて信仰する信者の割合が増える可能性を生む。PL教団の場合、若年層を対象にしたバトントワリングの活動が盛んなこともそれらの層の信者数を増やす要因になっているとみられる。また、これら2つの教団の拠点には教会長家族が住んでいることも家族的な雰囲気を生んでいる。

(表1) 年齢構成

年齢	天理教		PL教団		生長の家		カルデシズム	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
16~25	13	19.4	14	14.3	8	10.0	8	20.5
26~35	12	17.9	10	10.2	18	22.5	9	23.0
36~45	15	22.4	14	14.3	23	28.8	7	17.9
46~55	17	25.4	26	26.5	19	23.8	7	17.9
56~	10	14.9	24	24.5	12	15.0	8	20.5
計	67	100.0	98	100.0	80	100.0	39	100.0
平均年齢	39.6才		40.0才		41.1才		39.5才	

これに比べて生長の家では相愛会、白鳩会、青年会という、年齢と男女別に分けられた定期的な集会所が開かれており、天理教やPL教団のような家族的な雰囲気は感じにくい。また、集会所も約2時間程度のもので短い。生長の家の拠点はあくまでも教化のための集会所であるから、住み込みの管理者はいない。さらに開門及び閉門時間も決められている。拠点である教化部は信者が長時間奉仕する場所ではなく、また集会所の後に食事や飲酒が行なわれるような場所でもない。こうしたイメージはカルデシズムに通じる。カルデシズムでも拠点はあくまでも教化と救済の業が施される場所である。カルデシズムに若い年齢層の参与の割合が高いのは、子供のための教化活動が毎週行われているためだとみられる。

(2) 性別

日本国内では一般的に新宗教の信者に女性の割合が多いと言われているが、ブラジルにおいても同様である。しかし、カルデシズムでは男性の割合が比較的多いことが注目される(表2)。ブラジル地理統計院の調査によると女性の経済活動への参加の割合は、1980年に20.97%だったが1990年には30.06%に増加した。また、女性が家長である家庭の割合も1981年では12.4%だったが、1990年には15.0%になっており、別居と離婚の率もそれぞれ2.5%と1.2%から9.1%と10.1%というふう増加している。家族を支えるための社会的・経済的負担が壮年女性の肩のしかかっていることがわかる。日本の新宗教信者の女性の割合が多いことの背景には、このようなブラジルにおける女性の社会的責任の負担が大きくなっているという状況もあるだろう。

(表2) 性別

性別	天理教		PL教団		生長の家		カルデシズム	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
男性	21	31.3	27	27.8	20	23.8	17	43.6
女性	46	68.7	70	72.2	64	76.2	22	56.4
計	67	100.0	97	100.0	84	100.0	39	100.0

(以下次号に続く)